

Troyer 先生の横顔

都 留 春 夫

Troyer 先生は、いつも枕もとにメモ用紙をおいておき、朝早く眼がさめると、いろいろ頭に浮ぶ思いつきを書きとめておく習慣をもっておられたそうである。またわずかな暇を見て、学術書や雑誌に目を通し、各分野における新しい研究結果についての知識を頭に入れおくことをおこたらずやっておられた。先生の興味の幅が広く、話題も豊富で、先生独自の考えかたをもっておられたのも、このような努力のたまものであったと思う。

副学長時代の先生は国際基督教大学の基礎をかためることと、学生の指導のために、直接先頭に立って、文字通り粉骨砕心の苦勞をなされた。教養学部、大学院教育学研究科、行政学研究科のそれぞれが、日本のどの大学とも異なるばかりでなく、米国や他の外国の諸大学と比べても特異な性格のものにすることができたのも、Troyer 先生の独自の考えかたと、それを実行に移す推進力の大きさによるところが極めて大きい。

「われわれの仕事は、学生のために、学生に対して何かをするのではなく、学生と共に何かをすることだ。」というのが先生の学生指導に対する原則ともいえる考えかたであった。また、「学生を信頼しなければならない。その信頼がもてなくなったら、学生指導の責任者の地位を去るべきである。」という先生のいましめには、私も強く影響された。しかし、国際基督教大学での 17 年間の先生の体験には、このような先生の一貫した態度が十分に報いられたとはいえない時もあったと思う。

副学長という多用な地位にしながら、先生は奥様と共に、つとめて、学生や教職員を一人でも多く自宅に招いて、個人的に接触する機会をつくっておられた。第 1 回の卒業生が 4 年生になった年に、毎週 1 回、何人ずつかの学生を夕食に招かれたことがある。招待状をうけとった学生のなかに、

返事を出さないで、この夕食に参加する者がいたり、また顔を見せない者もいた。そのため、時には、準備した食事が、何人分も残ってしまい、翌日から数日間にわたって、お二人で毎日同じものを食べなければならなくなってしまった。学生たちは、果して、自宅に夕食に招かれるのをよろこんでいるのであろうか、疑問に思わざるを得なくなってしまった、と夫人が洩らされたことがある。

1958年59年頃には、毎月第1月曜日の夕食に、学生会の代表5名を自宅に呼んで食事を共にした後、9時半の終バスの時間まで、親しく学生会の活動について、意見を交換しておられた。このことが、大学当局と学生会との間の誤解や意見の違いを是正し、近密な距離を保つために、非常に役立っていた。たどたどしい英語で、何とか自分たちの考えを伝えようとする学生のことばを忍耐強く耳をかたむけ、その後で、先生自らの考えを、ていねいに伝えようとされた。何か学内に紛争の種になりそうな問題が起ると、いち早く学生のところに出かけて行って、話しこみ、時には顔を真赤にして議論をされることもあった。そう言う先生の努力が、だんだん険悪になって行く、大学当局と学生との関係を、不信に被われるところまで発展させずにすんでいたことに、大きな効力をもっていたのではないかと思う。先生のとをうけて、学生部長として、学生指導の責任を負った私も、いろいろ、先生からうけついだ方針で努力してみたが、どうしても先生には及ばないことを身をもって体験させられた。ただ、先生の説得力があまりにも強いので、学生が圧倒されて、何か押しつけられたような感じになり、先生の意図が逆効果を示すこともなかったとはいえないであろう。

国際基督教大学の歴史も最初の10年を経て、いちおう創設期の終了したところで、大学の教育が、学生に対してどのような成果をあげているかを、評価してみようとする意図も含まれて、価値観の研究が始められたのではないかと思う。3単位の一般教育課目として、価値の問題を、学生自身に考えさせ、そのなかに、調査を含め、宗教観、人生観、社会観の変化を測定し、更に時事問題を折り込んで、学生の意識調査も試みられるなど、多

角的・实际的な教育と研究のプログラムの計画をつくり、多くの教職員の協力を得て、幅の広い活動をまとめていかれたのは、まったく Troyer 先生でなければできないことであったと思う。先生を失ったいま、大きな指導力、推進力、統制力を要する、全学的な活動はなかなか同じようなスケールで実行していくことがむつかしそうな現状になっている。(本学教授)